
魔法少女リリカルなのは 革新者と魔法少女

ニコラス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 革新者と魔法少女

【Nコード】

N2223BA

【作者名】

ニコラス

【あらすじ】

ELSとの対話から50年の月日が流れ、刹那は異世界で変革を促す！これはただパターンを変えた『再生の天使』とお考えください

ブローグ

ELSとの対話から50年が過ぎようとしていた

対話を成功させた人類初の『純粹種のイノベーター』でその身と愛機にELSの一部を融合させた『ダブルオークアンタ』のガンダムマイスター『刹那・F・セイエイ』は愛機を駆り、外宇宙を航行していた

そんなある日、ヴェーダ（ティエリア）からの情報で今刹那のいる宙域で謎のエネルギーを感じたという情報が届いた
その調査を受けた刹那は、その宙域を隈なく調査した

「…センサーに異常はない」

いくら調査をしても何も発見できない

「だが、ヴェーダの情報が間違えているなんてことは…」

それはありえなかった

ヴェーダが提示してくる情報には必ず何かある。刹那はそう思った
すると、今まで何も反応しなかったセンサーがいきなり反応した

「なっ！あれは…！」

視線の先には黒く渦上になっている空間がある

しかも、その空間はあたりのデブリを粉々にして吸い込んでいた
ELSの時も木製近辺の星を吸い込んでいた

「っ！機体が…」

クアンタが吸い込まれていたのだ

操縦レバーを動かしてもクアンタは反応せず、ただ流れていくだけ

「うわあああああああああつつつ！！！！」

そして機体ごと刹那は吸い込まれてしまい、目の前が真っ暗になっ
てしまった

魔法の世界

「うつ…ここは？」

目を覚ますと、刹那は白い天井を見上げていた
わずかに臭ってくる消毒液の臭い

これだけで大体の人間はここが病院だということを理解するだろう

（たしか俺は…黒い何かに吸い込まれて…しかし、クアンタはどこだ？）

「あつ！気がつきましたか！？」

ナースであろう人が刹那がいる病室に入ってきた

「高町さん！彼が目を覚めましたよ！？」

すると、片方でポニーテールにしている栗色の髪の女性が入ってきた

「よかった！大丈夫ですか？」

「アンタは…？」

「私は時空管理局教導官高町なのです」

（時空管理局？連邦は新たな部隊でも作ったというのか？）

聞き慣れない言葉に刹那は連邦の一部と考えた

「俺は…どうしてここにいる？」

とりあえず聞いてみる

「あなたは次元震があつた地点で倒れていたんです。小規模だったからよかつたけど…」

「？次元震とはなんだ？それに時空管理局？それは連邦の一部か？」

「ふえ？」

刹那は聞き慣れない言葉が出てくるので、この際に一片に聞こうとした結果、彼女は驚いた表情を浮かべ間抜けな声を上げた
それを見た刹那は何故？といった表情で見る

「それにここは地球なのか？」

「ううん。ここはミッドチルダですよ。ひょっとしてあなたは地球出身ですか？」

また聞いたことがない単語が出てきた

しかし彼女の言い方はここは地球ではなく別の場所だと言っている
感じた

つまりは異世界

とにかく刹那は彼女の質問に答える

「そうだ。俺は中東出身だ。名前からしてお前は日本出身か？」

「はいそうですけど…、ひとつ聞いていいですか？」

なのはの表情が真剣になる

「本当に管理局を知らないんですか？」

「俺が知っているのは地球連邦だ。それ以外の軍は知らない。時空管理局というのとは一体どんな組織なんだ？」

「簡単に言うと次元世界を管理などを行っている組織です」

刹那は管理という言葉に強く反応した。過去にもアロウズの虐殺行為で連邦がこういった形で世界を管理、統括していただから刹那には管理局が良いものに思えなかった

「…あなたは本当に管理局を知らないんですか？」

「ああ。それに話を聞く限り、ここは俺が知らない場所のようだな」

そして刹那は静かに目を閉じて何かを考える

そして刹那は何かを思い出したのか、目をハッと開けてなのはに聞く

「高町なのは、俺を見つけたとき、一緒にMSがなかったか？」

「？モビルスーツってなんですか？」

「（そうか…。ここは異世界だ。ガンダムを知る訳がないか…）俺が乗っていたものなんだが…」

「いえ、あなたはその場に倒れていましたよ？」

「なっ！？（ならクアンタはどこに！？）」

「でも、あなたのすぐ近くにこれが落ちていました」

なのはは懷から何かを出して刹那に見せる

「青い…宝石？」

「これはあなたのじゃないんですか？」

「わからない。少なくともこっちに来るときには持つてはいなかった」

刹那は首を横に振ってわからないことを示す

だが、刹那はその宝石に惹かれる何かを感じていた
懐かしく、まるで自分のもので、いつも一緒にいた感じ

「…『クアンタ』？」

ふいにそう呟いた

そしてその言葉に反応するかのように、宝石がなのはの手から離れて浮いた

「な、なに！？」

なのはは何がなんだかわからない

だが、刹那には確信があった。これは自分の『ガンダム』であろうと頭にあるひとつの単語が流れてきた

体を起こして、ベッドから出て立ち上がり、宝石に手を差し伸べて、その言葉を口にする

「『セットアップ』!！」

刹那の体が青白い粒子に包まれていき、部屋を粒子『GN粒子』で埋め尽くしていく

なのは手を目を隠して、目をギュツと瞑る

そして光が収まると、刹那の服装が変わっていた

青と白のスマートな装甲、右手についた緑色の刃の折り畳まれた実
体剣、腰についた大小二本の剣、背中のコーン状のパーツから放出
されている淡い青白い粒子

その姿はかつての彼が乗っていた愛機

「『エクシア』?」

「ふえ~~~~~~~~!!??」

なのはがこちらを見て間抜けな声を発する

彼女は尻餅を付いて姿が変わった刹那を見上げていた

「（おひさ〜!!マスター!!）」

刹那の頭にフェルトにも似た子供のような声が響く
とりあえずその者の名を刹那は口にする

「…クアンタか?」

「（そうだよ〜!マスターのガンダム『ダブルオークアンタ』なの
だ〜!）」

「とりあえず、少し静かにしてくれ。頭が痛い」

「（ぶ〜！マスターとの久しぶりの対面だったのに…）」

「だ、誰と喋ってるの？」

「？クアンタだが…」

なのはから見たら刹那が一人でしゃべっているようにしか見えなかった

「クアンタって、そのデバイスなの？」

「デバイス？」

「（マスター、それは僕のことだよ。とにかく一回元に戻るね？）」

「ああ」

そして刹那の体が一瞬光って、元の患者が着る服に変わる

だが、隣には知らない少女が立っていた

青白い腰まで伸びた髪に青と白のドレスのような服、エメラルドのような色をした瞳

背は刹那の肩ぐらいだろうか？

「だ、誰？」

「僕？僕はマスターのデバイスの『クアンタ』なのだ〜！！」

笑顔で元気に答えるクアンタのテンションに二人はついていけない

「ていうか、あなたはデバイスなの！？」

「そうだよ。この世界で言うならインテリジェントデバイスだけど、ちよつと変わってるんだよね」

「そうなんだ」

『でも、本当に珍しいですね。擬人化ができるインテリジェントデバイスとは』

「今のは？」

「私のデバイス『レイジングハート』だよ」

『よろしく』

「あ、ああ。だが、高町なのはこれはなんなんだ？」

「…『魔法』をあなたは信じますか？」

「……『魔法』…？」

あの御伽噺にでてくる魔法か？だが、さっきやったあれとは違う気がする…

でも、さっき自分がもう立証してしまった
信じるしかないな…

「私たちは魔法を使って戦うんです。さっきあなたがなったような姿になって」

「…そうか……」

「あつ！そろそろ行かなくちゃ。あと、お医者さんからはあと数日は安静とのことなので！」

「ああ。わかった」

「またね〜！」

「そういえば、あなたの名前は？」

なのはは名乗ったが、刹那はここまで明らかにしていなかった

「俺の名前は刹那・F・セイエイだ。敬語はいらない」

「うん！またね！刹那君！」

そう言ってなのはは病室を出ていった

クアンタは手を振って見送った。刹那は再びベッドに入って眠りについた

二日が経ち、刹那は退院することができた

怪我といったものではないし、それにイノベーターとしての彼の体がより回復を早くさせたのだ

クアンタは現在は待機状態に戻ってもらい、刹那の首にペンダントとしてかかっていた

なのはが迎えにきて、刹那に会わせておきたい人たちがいるからと彼女の親友の実家まで連れて行かれた

そしてなのはがその人の家のインターホンを鳴らす
出てきたのは長い金髪に赤い瞳の女性だった

「あ、なのはいらつしやい。…あなたは？」

「刹那・F・セイエイだ。敬語は慣れてないからいらない」

「そう。私はフェイト・テストロッサ・ハラウンだよ。よろしくね、刹那」

フェイトと刹那が握手をする

その時にフェイトの顔が少し赤らんだのは気のせいだろう

「早速お邪魔していいかな？」

「あつうん。どうぞ二人とも」

「お邪魔します！」

なのはは普通に入っていった

だが、刹那はこの家の奥から何かを感じて警戒しながら入る

幸い靴を脱いで家に上がるといいうのは過去に経験しているので簡単だった

リビングに出るとそこにはなのはとフェイト以外の女性が3人と男性一人がいた

そして銀色の髪妖精みたいなのが一体、青い毛の狼が一匹がいた

「その人がなのはちゃんの言ってた次元漂流者かいな？」

「うん。そうだよ」

「刹那・F・セイエイだ。敬語はいらない。よろしく頼む」

「うちは八神はやてといいます。こっちはリインフォース?といいます」

「リインフォース?ですう!」

「次はあたしだな。ヴィータだ。言っておくが、お前より小さいけどな、年は私の方が上なんだからな!」

刹那はイノベーターだから人の何倍もの寿命があるからそれなりに長生きはしているが、外見は22歳のままだが、ヴィータはそれよりも長く生きている。刹那には謎で仕方がなかった

「ああ。よろしく頼む」

「次は僕かな?クロノ・ハラウンだ。次元航行艦の艦長を務めている。あと、フェイトの義兄でもある。宜しく頼む」

「刹那・F・セイエイだ」

見た感じ二人はうまくやっていけそうだ

二人は握手をする。お互いを睨み合うかのように握手を終えて、刹那は青い毛の狼に目をやる

「...お前は喋れるんじゃないか?」

「っ!...よくわかったな」

「そんな感じがしたからな。魔法はそう言ったこともできるんだろっ?」

「フツ…なかなか見どころがあるな。私は守護獣のザフィーラだ」

「ああ」

ELSのこともあるので刹那は特に驚くといったことはない

そしてここに集まったのは他にもない。刹那のこれからをどうするかだ

「それで、刹那君はこれからどうするんや？なのはちゃんからはデバイスを使った聞いたんやけど…」

「ああ。リンカーコアもある。ランクはA A A +らしいが…」

「驚いちゃったよ。いきなりなんだもん」

たしかにあの時はいきなり発動したから、なのはは焦っていた
よく周りが騒がなかったものだと思っていた

クアンタに聞いてみたら、その時は周りに誰もいなかったからだ
そうだった

「でも、魔法の使い方は知らないんやろ？」

「うん。教えてないもん」

（だが、エクシアならモビルスーツと同じようにできるはずだ）

刹那はそう考えた

「マスター、そろそろいい？窮屈で疲れたよ！」

「あ、ああ。構わないが……」

そして刹那の胸元にある宝石が光って、クアンタが人の形で出てくる刹那となのは以外のメンバーが目を見開いて少女の姿となったクアンタを見ている

「あれ？なのはさん、みんなどうしちゃったの？」

「にやはは……。多分クアンタちゃんだと思うよ?」

「にやんで？」

いきなり猫語を使ってクアンタは可愛らしさをアピールしだす
約一名、目が血走っている

「か」

その一名が手をわきわきさせながら、立ち上がる

「可愛ええええええええええつ!!!」

「ニヤツ！」

「何っ！？」

その一名、はやてが刹那ですら反応できないスピードでクアンタを拉致する

クアンタは猫語の悲鳴を上げて連れて行かれた

「なにこの子！？めっちゃカワエエー！」

頼ずりするはやてにクアンタはなすすべなくそれを受け入れるしかない

「にやめろっ…！」

「キヤアアアアッ…！」

クアンタが言ってもそれは逆にはやての変態心に油を注いでしまう
必死に抵抗するクアンタだが、はやての力には敵わない

「うにやっ…！…！…！…！…！…！…！」

「もう食べちゃいたいわ…！」

「にやっ…！？マスタっ…！」

刹那に応援を求める

「…ハア…お前が戻ればいいだろうっ」

「あっ。そうだね」

そしてクアンタは再び刹那の首に宝石となって戻り、はやてから逃げる

「あっ！クアンタちゃんは…！」

「はやて、いい加減にその癖やめろよ…」

「これが私や!!」

「威張ることじゃないと思うよ?」

「そうだよはやてちゃん…。それに今は刹那君のことでしょ?」

「ハッ! そうやった!」

「忘れてたの!?!」

「うん!!」

「はっきり言うことが!!?!?!」

そして再び話し合いが行われる

「で、なのは。刹那のデバイスの種類は?」

「クアンタちゃんが言うにはインテリジェントデバイスらしいよ?でも、調べようとしたら全部エラーが出ちゃって…」

「どういことなん?」

「未知の技術が使われているのか…それともデバイス本体がそれを拒んでいるのか…」

「どうなんだ?クアンタ」

『後者だよ！だって僕の中あまり見られたくないんだもん！』

と、クアンタの理由は子供みたいなものだったが、刹那はそれ自分なりに納得させた

この姿でもガンダムだ。つまりなかには戦争の引き金になるものが詰まっている

クアンタはそれを守ろうとしたのだろう、と刹那はその考えで納得した

「なら、デバイスの件は置いて、刹那君はどうするん？管理局に入るんか？」

「たしかにデバイスを無断で所持するのは禁止だもんね」

「どうするんだ？刹那・F・セイエイ」

（管理局には絶対何かある。仮に入ったとしてもおそらく俺は利用されて終わるのは間違いない。それにクアンタを管理局に利用されてしまったら戦争が起きかねない。しかし、かといって一人ではどうすることもできない。くそっ！どうすればいいんだ！？）

刹那は頭を悩ませる。それに刹那は軍というものにはいい印象を持つていない

「（マスターはマスターの考えで動いてよ）」

（クアンタ？）

「（僕はマスターと戦ってマスターと死ぬ。それが四機のあったガ

ンダムのうちの一機の僕の目標みたいなもの」

(…)

「(管理局は歪んでいるのは僕も感じてる。だからこそ、中から変革させて変えようよ?)」

(…ああ。俺が迷っていても何も始まらない。それに俺には戦いしかない。なら俺は俺のやり方で管理局を変える！お前と共に…！)

心の中でクアンタと共に決意を新たにする刹那

「どうするの？刹那…」

「…俺は管理局には入らない」

「…理由は？」

「俺は正直言つて管理局というものを信じていることができない。俺の世界でも軍はあったが、上層部が腐りきっていた。おそらく管理局の上層部もそうだろう？クロノ」

「…ああ。僕も伊達に何年も管理局に所属はしていない。嫌でもそうだった物事は耳にも入ってくる」

「だから、俺は管理局には入らない」

「そっか…「だが」…えっ？」

「ここにいるお前たちなら信じていることができる。だから俺はお前た

ちに協力する」

刹那の一言に全員驚いた表情で刹那を見る

「俺はここに居る者たちに協力をする。そして管理局を変える」

刹那の目には決意の光が宿っていた

その赤い瞳を輝かせ、刹那は全員を見る

その瞳になのはとフェイトは顔を赤くしているのは気のせいではないだろう

そしてクロノが微笑み、立ち上がる

「いいだろう。だが、その前に君の実力が知りたい」

「…どうすればいい？」

「俺と模擬戦をしてみよう」

魔法の世界（後書き）

どうかな？

模擬戦と協力

クロノが模擬戦を申し込んできたため、今二人はクロノが艦長を務める次元航行艦の訓練室にいた

他のメンバーは二人の模擬戦の見学

すでにクロノの手には白い杖が握られて、あとはクロノ自身が立ち直れば始められる状態だ

対して刹那はこの世界に来たときに何故か着ていたソレスタルビーイングの制服だった

首には待機状態のクアンタがある

「そろそろ始めるか…？」

「ああ」

「（それじゃ、行ってみよう！）」

「クアンタ、セツトアップ！！」

青白い粒子が刹那を包み込み、粒子が消えると青と白のスマートな装甲を身に付けた刹那がいた

背中のコーン状のパーツからは順調にGN粒子が放出されている

「それが君のデバイスか？」

「ああそつだ。これが俺のガンダム『ガンダムエクシア』だ！！」

そして右手に『GNソード改』、左手に『GNシールド』が装備されて、エクシアの本来の姿となる

両者は構えて、そして沈黙
見ているのはたちにとって短いようで長く感じた
そして、

「ハアアッ!!」

刹那がGNソード改をライフルモードでビームを放ち、戦闘は始まった

地面擦れ擦れを飛行しながら放ったピンク色の閃光が至る方向からクロノに向かって飛んでいく

「この程度っ!」

その射撃はあまりにも正確だった

クロノはそれを空中に飛んで避けた
それを読んでいた刹那は瞬時にソードモードに切り替えて足に力を込める

「(クアンタ!飛行制御を頼む!)」

「(りょくかいにやによだ!!)」

クアンタの言葉のおかしさに刹那は疑問を覚えずにはいらなかった
だが、すぐに切り替えて、刹那はGN粒子を吹かせてクロノに向かって飛びかかる

「ここは、俺の距離だ!」

「何っ!?!」

身を翻すが、すでに刹那はGNソード改を振り上げていた
そしてGNソード改を右上から振り下ろす

「ぐっ！」

クロノはそれを体に当たる直前に障壁で防御する

「今のはさすがにヒヤツとしたぞ…。まるで読んでいたような動き
だったな」

「クアンタのサポートがあつてこそだ」

「（えへへ…）」

そして一旦離れる二人

両者の表情には笑みが浮かべられていた
そして両者は再び動き出す

「でやあああつ…！」

GN粒子を放出して刹那は再びクロノに切り掛る

『ステインガレー』

射速に優れた砲撃魔法で刹那を迎撃するクロノ
その魔法は刹那に向かっていき、爆発が起きた

「これで…！」

だが、クロノの予想は裏切られてしまう

「なっ!?!」

左手のGNシールドを無くした刹那が、両手にピンク色の刃のビームサーベルを持ちクロノに突進する

GNシールドで砲撃を防いで、ビームサーベルを瞬時に抜いたのだ

「これが俺の!」

「くっ!」

「ガンダムだ!!!」

反動で動けないクロノをすれ違いざまに十字に切り裂く…もちろん非殺傷設定である

「まさか魔導師になつて間もない素人に負けるなんて…君は一体前の世界で何をしてたんだい?」

「…俺には戦うことしかできない。だから戦い続けた。今はこれしか言えない」

「そうか…」

それを聞いたクロノの表情が暗くなる

観戦しているのはたちには刹那が言ったことは聞こえていない

「すごい…。お兄ちゃんに勝っちゃった」

「シグナムがここにいないくて正解だったな…」

「にはやは、同感なの…」

「刹那さん、かつこよかったですう!」

「それにしても刹那君もやりおるな。あのクロノ提督にほぼ無傷やで?」

と、刹那とクロノの戦いについての感想を述べるのはたち

部屋が変わってそこにはクロノたちがいる

「それでクロノ君、刹那君はどうなるの?」

たしかに模擬戦であのクロノに勝ったのだから、管理局としてはこのまま見逃すわけにもいかない
かと言って入隊はしない刹那なのだから、どうしようもない

「刹那・F・セイエイ、君に一つ頼みたいことがある」

「?なんだ?」

「今度、試験運用として新設される部隊『機動六課』に民間協力者として協力してくれないか?」

「えっ！？クロノ君！？」

「お兄ちゃん！？」

「クロノ君！？」

「…理由を聞かせてくれないか？」

「君には実力がある。それに管理局としてもその力を野放しにするわけにはいかないのは分かっているな？」

「…ああ」

「その力で今から半年後にあそこにいるはやてが部隊長となる部隊に協力して欲しいんだ」

「八神はやてが？」

刹那は驚きの表情ではやての方を見る

当の本人は刹那に苦笑いをしながら手を振っている

クアンタも待機状態で顔は見えないが、驚きの表情を浮かべていた

「彼女たちもその部隊に所属する。どうだい？」

「……わかった。協力しよう」

「いいんか？刹那君は管理局を信じてないんやろ？」

「さっきも言ったがここにいる者たちは信じることができる。そう感じるんだ…」

全員安堵の表情を浮かべる

これで刹那は半年後に新設される部隊『機動六課』への協力者となった

「でもよゝあと半年どうするんだよ？ 私たちは忙しくてこいつのこ」と見てられないぞ？」

「…なら、なのはちゃんとフェイトちゃんに刹那君の教導をお願いできひんやろうか？」

「うん。私は別に構わないけど、フェイトちゃんは？」

「私はそんなに暇がないからなのはに任せるよ」

「あらフェイトちゃんは刹那君と一緒にいたくないんか？」

「ちょっ／＼はやてゝ！？」

フェイトが顔を赤くしてはやてに食いつく。それをなのはたちは笑いながら見ていた

「おい、刹那」

「どうした？ クロノ」

「フェイトに手を出すなよ！」

ここでシスコンが本領を発揮。何を言っているのか理解ができない
刹那

「お、おにいちゃん!？」

「クロノ君がシスコンと化した!？」

そこからクロノの暴走が始まり、フェイトははやてにからかわれながらクロノの暴走を止める

そしてフェイトの一言でクロノの暴走は沈静化した(その一言は読者に任せる)

刹那はクロノの変わりようを目を丸くして見ていた
クロノはフェイトの一言により暗くなってしまった
クアンタは待機状態でクロノのことを笑っていた

「マスター、これからどこに住むによ？」

クアンタが擬人化して刹那の隣に立つ

まだ言語が可愛らしくなっている。クアンタの中でブームなのか？
刹那がこの言葉には疑問しか生まれなかった

「たしかに君は管理局員というわけじゃないしな…」

「どうすんだよ？はやて」

「うちは部屋余ってないで？家族が多いしな」

「お兄ちゃん、私たちの家は？」

「いや、あまり余っていないと思うぞ？」

「なのはちゃんの家はどうや？刹那君なら襲うこともないやろっし」

「「お、おおおおお襲う！！？？／／／／／／／／」」

なのはと顔を真っ赤にして手をバタバタして慌てる。フェイトも顔を赤くして刹那をチラチラ見ていた

一体何をやってっているんだ？と思う刹那

だが、刹那にはもうひとつ気になることがあった

「それからリインフォース？、なぜ俺の頭の上にいる？」

「えへへ、刹那さんの髪の毛は気持ちがいいですう」

リインが刹那のウェーブがかった髪に寝っ転がっていた。とても気持ちよさそうにだ

別に嫌がっている様子はないが、頭に違和感があるようだ
はやての目はとても優しくリインを見つめていた

「…俺は別に野宿で構わないんだが」

「それはダメ（だよ）！！！！」

なのはとフェイトがすごい剣幕で刹那に迫る

「ひゃう！？」

リインも二人がいきなり迫ってきたことに驚いてしまった
頭から落ちそうになり、なんとかこらえた

「これから協力してくれる人に野宿なんてさせられないの！」

「そうだよ！それに刹那はこの世界に来てまだ日が浅いんだから！」

と二人が言ってくるが、刹那はあまり迷惑をかけたくなかった
だが、刹那は今起きている現状をどうにかせねばと思った

「……近いんだが…？」

「っ／／／／／」

そして二人は慌てて刹那から顔を赤くして離れた

もう何がなんだかわからない刹那。リインも自分を落ち着かせよう
と深呼吸をしている

他のメンバーは二人の行動に驚いていた

「ハア…とにかく俺は高町なのはと行動を共にすればいいんだな
？」

「ああ。魔法戦に関しても彼女に聞いてくれればいい」

「これからよろしくね！刹那君！」

「私も時間があれば時々教えられることがあれば教えるから」

「ああ。宜しく頼む。高町なのは、フェイト・T・ハラオウン」

「私のことはなのはって呼んで！それじゃあ他人みたいで落ち着か
ないの！」

「私もフェイトでいいよ。私だけ呼び捨てなのもあれだから」

「…わかった。なのは、フェイト」

「よろしくにゃによ〜!」

そして刹那の半年間の魔法訓練がスタートした

模擬戦と協力（後書き）

UVERworldの新曲、今さらだけどいいね!!

グダグダだったな.....もういいわ!!

刹那の訓練 前編（前書き）

といっても訓練という訓練はしていない

アインハルトは可愛い。もう一度言う。アインハルトは可愛い！

大事なことから二回言ったぞ

刹那の訓練 前編

その後、なのはの家に泊まることになった刹那

地球に家族がいるそうだが、管理局に所属しているためミッドチルダで暮らしているそうだ

長期の休暇が取れたら時々帰っているということだ

そして今、刹那となのはとクアンタは今後についてのことを話し合っていた

当然なのはは教導の仕事もある。それゆえにずっと刹那の訓練を見ていられるわけではない

「で、なのは、なぜそこで着替えている？」

「ふえ？」

刹那の目の前で堂々と着替えをするなのは。いくらそういった感情に疎い刹那でもそういうのはだめだ
目を逸らして家の中を見渡す刹那

「にやはは。今度から気を付けるね」

「頼む。このままだと俺が危なくなる」

そう言ってさっさと着替えを済ませるなのは

「でも、なのはさんは美人だにゃ〜。それに体つきもとても軍人とは思えないにゃ！」

「クスッ、クアンタちゃんも美人だと思うよ？それに私よりフェイ

トちゃんの方がすごいんだから」

目をキラキラさせてなのは羨ましそうな瞳で見るクアンタだが、クアンタも外見からすれば16歳ぐらいで、体つきもなのは以上フェイト未満な体だ

まあ胸はなのはよりは大きいがね…

「それで、今日から訓練をするのか？」

「うん。あんまり教えられる機会もないから。でも刹那君も模擬戦をしたばかりだからあまり無理はさせないからね？」

「そこについては問題はない。体力については人一倍はあるつもりだ」

「へえーそういえば刹那君は前の世界で何をしていたの？」

刹那の顔に翳りが差す

「あつ、ごめんね。聞かない方がよかったかな？」

それを察したなのはが謝る

「…いや、ただ今話すようなことじゃないただ。時が来たらいずれ話す」

「…うん。絶対教えてね？約束だよ？」

「ああ。話が逸れたな。それでどこで訓練をするんだ？」

「あつうん。訓練室を使う許可もとってあるから、少し外で待つてくれるかな?」

「了解。行くぞクアンタ」

「はいにやのだ!」

そして刹那とクアンタは外に出てなのはのことを待つ

刹那は外で待つている間にクアンタと会話をしていた

「クアンタ、他のガンダムの武装はあるか?」

「マスターが乗った機体の武装だけにや」

「そうか…。ダブルオーの状況は?」

「まだまだにや。ごめんにや?マスター…」

「いや、お前が謝ることじゃない。それに今はエクシアだけで事足りる」

「マスター…」

「それに俺とお前なら負けないさ」

「…うん!!」

そして暗かったクアンタの表情が明るくなった
それを見た刹那は自然と表情がゆるくなったのを感じた

「お待たせ…何を話してたの？」

「これは僕とマスターの二人だけの秘密にや〜!!」

「ええ〜！教えてよ〜！」

（というより、秘密にするようなことなのか？）

なのはとクアンタを見ながら密かにそう思った刹那であった
たしかに秘密にするような内容は会話の中には入っていなかったはず
でも、そこはクアンタのあれだろっねby作者

「とりあえず訓練室に行こうか。フェイトちゃんも来るみたい」

「フェイトも？」

「えっ！？フェイトさんも来るの！？」

「うん。だから行こっ！」

「うん！」

「ああ」

そして三人は訓練室に向かった

三人が来た場所は特に何もない普通の部屋だった
だが、広さは結構広かった

「あつ！フェイトちゃん！」

「なのは」

そこには黒い杖を持ったフェイト・T・ハラオウンの姿があった
さつき見た服と髪のとめ方が違うことを見て刹那はあれがフェイトのバリアジャケットなのだろうと考えた

「フェイトちゃん、どうしてバリアジャケットなの？」

なのはも気になったのだろう

「うん。クロノとの模擬戦を見てたら私も刹那と模擬戦しなくなっちゃったんだ」

ここに二代目バトルマニアが降臨した。しかも無自覚というタチが悪い方のな（それならまだあいつのほうがよかった）by作者

「刹那君はどう？二回連続の模擬戦だけど…」

「構わない。それに少し試したいこともある」

「試したいこと？」

なのはもフェイトも疑問に思うが、わからない以上模擬戦で見るしかない

刹那は頭の中で色々と考えていた

（たしかにエクシアは俺のガンダムだが、武装は接近戦が主体だ。自信はあるが、それ以外も磨いておく必要がある。接近戦も砲狙撃戦もものにしなくては、この先勝てない。少なくともダブルオーさえあれば…）

ダブルオーになればそういったこともだいぶ生かされてくる

狙撃もだいぶできるようになっているが、まだあの二人には遠く及ばない

今のうちに鍛えておく必要があると刹那は考えたのだ

「それじゃあ、すぐに始める?」

「私はそれでいいよ。体も温まってるし」

「俺も構わない。行くぞ、クアンタ」

「了解にやのだ〜!」

「クアンタ、セツトアップ!」

そして刹那は青と白のスマートな装甲を身に付けて、エクシアとなつた

右手にはGNソード改が装備され、今回左手にはGNシールドは装備されていない

「クアンタ、GNブレイド」

「GNブレイド、セットアップ！」

そして刹那の両手に大小二本の実体剣が握られる

ガンダムエクシアのセブンスードの内の二本『GNショートブレイド』『GNロングブレイド』

「じゃあ、始めよつか。一応制限時間も付けておくね。時間は5分間」

なのはの説明が二人の耳に入ってくる

「どちらかが戦闘不能になるかギブアップした時点で終了だよ。二人とも準備はいいかな？」

「うん。いいよなのは」

「問題ない」

フェイトはインテリジェントデバイス『バルディッシュ』を構える
刹那はGNブレイドを前で構え、GN粒子の散布を開始する

「それじゃあ、模擬戦、開始！！」

「ハアアアアッ！！」

「なっ！？」

開始と同時にフェイトが斧の形態をしたバルディッシュを振りかぶ

って刹那に向かってくる

しかもクロノより速いため刹那は少し反応がおくれたが、GNブレイドを交差させて受け止める

「このやるつつ!」

「くっ!」

GNブレイドを切り払ってフェイトを後退させる

「フォトンランサー…ファイアツ!」

黄色いスフィアが刹那に向かってくるが、

「この程度っ!」

それを難なく避ける刹那。これよりはファングの方が断然速かった

「でやああああっ!」

「バルディッシュ!」

斧から黄色い刃の鎌に形態が変化して、GNショートブレイドを防御するが、

「まだだ!」

「えっ!」

ロングブレイドでバルディッシュを切り上げて、無防備にさせる

「ハアッ！」

「キャアアアアッ！！！」

非殺傷設定のGNロングブレードをフェイトの体に切りつけ、フェイトは後ろに吹っ飛ぶ

瞬時に態勢を整えたフェイトが刹那の視界から消えた

「！ちいつ！」

「避けた！？」

高速でフェイトは後ろに移動してサイスフォームのバルディッシュを刹那に振るが、それを察知した刹那はそれを体を捻って回避する体の捻りを利用してGNブレードをフェイトに振るう

「さすが刹那だね」

だが、フェイトはそれを障壁で受け止めて微笑みながら刹那を見る

「ああ。だが、お前のスピードは俺以上だ」

そう言う刹那もほんの若干微笑みながらフェイトと相対する障壁とGNブレードがぶつかり火花が散っている

『あと、3分だよ！』

なのはから残り時間が告げられる

そして二人は一旦離れて少し荒くなった呼吸を整える

フェイトの黒い服には一部切れているところがあった。GNブレイドで切られたあと

「バルディッシュ、カートリッジロード」

そして再び鎌の形態になり、フェイトはそれを振りかぶる

「ハーケンセイバー！」

そしてそれを振った。すると、黄色い刃が刹那に向かってきた

「（飛行制御頼むぞ！）」

「（りょ〜かい）」

GN粒子を放出して空に飛ぶ刹那。フェイトが放った攻撃はそのまま刹那のいたところを通り過ぎる

「っ！」

横を見ると、そこにはフェイトがバルディッシュを構えて、こちらに攻撃をしようとしていた

『ハーケンスラッシュ』

フェイトは上からバルディッシュを振り下ろすが、

「えっ！？」

刹那はそれを横に少し動いて躲した

フェイトはそれを予測していなかったのか、無防備になってしまう

「終わりだ」

GNブレイドをフェイトの首元に突きつける刹那

「ううゝ……負けた……」

フェイトが負けを認めて、刹那はGNブレイドを首元から離して腰にマウントする

刹那は勝っても別になんとも思っていないようだが、フェイトに至っては結構悔しそうにしていた

「すごい。フェイトちゃんにも勝っちゃったよ」

なのはも親友が負けて驚いていた

「次はどうすればいい？」

刹那がなのはに聞く

「今日は射撃だけしよっか。模擬戦で疲れているだろうしね」

「了解」

的がいくつも現れ、刹那はGNソード改をライフルモードにする

「狙い撃つー!!」

銃口からピンク色のビームが的を撃ち抜き、刹那はすぐに目標を切

り替える

どんどん撃ち抜いていき、すぐに終了した

「すごい……誘導なしでほとんど一撃……」

「私でもさすがに無理があるよ……」

なのはとフェイトは刹那の射撃センスに度肝を抜かれたが、これは刹那が命懸けの戦いで身に付けた技術であり、進化した者の力である

そして訓練は終了して、普通だったら疲れて倒れてもおかしくないはずなのに刹那はケロッとしていた
少しだけ汗をかいているだけで、特に疲れているような感じはしなかった

「刹那の体力ってすごいんだね……」

「うん。一応この量だったら倒れてもおかしくないの」

刹那の体力は化け物かと思った二人

「今日はこれで終わりか？」

と、聞く刹那

「まだするの!？」

「マスター、そろそろやめたほうがいいと思うにゃ。模擬戦の疲れもあるんだよ?」

「それにもう夜だから、帰る？」

「ああ。そういえば気になっていたんだが、フェイト」

「うん？どつしたの刹那？」

「お前の名前なんだが…」

「…うん。私ね子供の頃にね親に捨てられて、その時に私を養子にしてくれたのがクロノのお母さんなんだ」

「…すまない。いらんことを聞いた」

「ううん。捨てられても私は今でもあの人のことお母さんだっと思ってるから」

「フェイトちゃん…」

フェイトの心情を察したなのは

刹那もフェイトの心情が手に取るように分かっていた。イノベイターの力でフェイトの心が自分の中に流れ込んでくるのが感じられる悲しみなどがフェイトの中に渦巻いている。そう感じた刹那だった

「そういえば刹那君の両親は？」

「…（言っているのか？いや、下手に気を遣わせるわけにはいかない。それに彼女たちにはいずれ話すことになる）」

刹那はそう思って、口を開く

「俺の両親は中東で暮らしている。今はわからないが…」

「へえ、刹那の両親に会ってみたいな」

刹那の嘘を信じているフェイト

なのはも嘘だと分かっているようだ。クアンタはそれを理解しているようだが…

「…そろそろ帰ろう。クアンタも眠たいだろう?」

「うん。ねみゆい…」

目をこすって眠たいことを主張する

「そうだね。帰ろっか。フェイトちゃんも家においでよ」

「いいの?」

「気にしないで。一緒に食べよ!?」

「う、うん」

そして刹那たちはなのはの家に帰っていった

刹那の訓練 前編（後書き）

前編はフェイトとの模擬戦

後編はどうなるかな？ひたすら訓練か？

あと一つ言っておきたい

フェイトのソニックフォームは破けたらエロいぜ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2223ba/>

魔法少女リリカルなのは 革新者と魔法少女

2012年1月8日19時52分発行